



- 技術者の質のために生産性が問題
- 産学双方にコンピュータ科学の専門教育が必要
- 達成されれば、人が余る

この記事の内容は、例に挙げた組み込みソフトウェアの規模が当時のものより 1 桁から 2 桁大型になっている点を除けば、現在も書き直す必要がまったくない。問題はさらに深刻になっていると考えられる。

数年前に、最新の OS を導入しようとして技術者を外国の講習に派遣したところ、オブジェクト指向の用語自体がまったく分からなくて立ち往生したという話を聞いた。日本のソフトウェア技術者には、他の業界の技術者では考えられない問題があることが分かる。

責任ある立場の技術者で、大学で専門技術を学んでくることが期待されていないのは、日本のソフトウェア業界だけであろう。よその国でもそうしたことは仕方なしに行われることはあっても、それが当たり前と考えられているのは、日本だけのことである。

ほとんどの国で不足する情報技術者には高い給料が払われている。これを目指して大学の情報関連の学科には優秀な学生が殺到し、競争が行われる。これに対して日本では、就職活動の中でソフトウェア業界なら就職できそうだと感じた学生がこの業界に入ってきて、数週間の技術訓練だけでソフトウェア制作を行っているのだから、勝負にならないのは当然、むしろよくやっているという評価もできる。

日本でも、ようやくソフトウェア業界では新卒にも年俸制を採用し、実力に応じて給料を払う会社が出てきた。また、転職を考える IT 技術者を対象に発行された雑誌が予想の 2 倍以上の読者を獲得している。日本の状況は確実に変わりつつある。

情報処理学会では教育に対してどんな取り組みをしてきたかを調べてみたところ、1969 年にはすでに、教育調査研究委員会が設けられていた。私の知っているのは、1988 年に「コンピュータと教育」研究会が始まったあたりからである。1991 年には情報処理教育カリキュラム検討委員会が設けられて、情報工学のカリキュラム検討を文部省の委託研究として行った。この結果は、情報関連学科の設立審査に使われるようになり、ようやく専門学科としての情報関連学科の内容が整うようになってきたのである。この委員会はその後、理事会直属の情報処理教育委員会に発展して今日に至っている。

このコラムでは、「情報技術と教育」の問題を学会の活動と関連させて、考えていきたい。

(平成 15 年 5 月 19 日受付)

日本人情報技術者のレベルは世界最低？

大岩 元

(慶應義塾大学／情報処理教育委員会 前委員長)
ohiwa@sfc.keio.ac.jp

日本の情報技術について、会員のみなさんはどのようなお考えであろうか。世界一、それとも世界で最下位。

大学については、スイスの経営開発国際研究所 (IMD) が各国の民間企業に対して行ったアンケート調査によると、日本の企業人による日本の大学の評価は厳しいもので、49 カ国中 49 位という文字通り最下位であることが最近報道された。情報技術はどのようなのであろうか。

社会一般の見方は、「世界一とまではいかないが、上位につけている」というものであろう。これだけ世の中でコンピュータが幅をきかせている国も少ない。一方、これを商売にする情報産業の中でも製造業にあたるソフトウェア業界では、日本人技術者に見切りをつけてインド人や中国人の困り込みに血道をあげている企業が目につく。日本の情報技術者のコストパフォーマンスに問題があることは、4 月号の松原友夫氏による「ソフトウェア産業にもデフレがやってくる」に詳しい。

私自身は 40 年前の学生時代から、「日本の大学教育は世界最低、なんとかすべきである」と考え、機会あるごとに発言してきた。そのことを如実に反映しているのが、日本のソフトウェア業界の実力ではないかと思う。1992 年に慶應に移ったとき、日本のソフトウェア業界の問題点について竹中平蔵さんに話したところ、まず日経新聞の経済教室に出したら、という示唆をもらって書いた記事の主張は次のようなものである。

“日本のソフト技術者” 日経新聞 経済教室

(1992 年 6 月 6 日)

- ソフト技術者不足は量でなく質の問題
- 情報工学科でもコンピュータ科学が教えられていない場合が多い

